

回想

— 心暖まる人を想う —

風韻

Vol. 39

大きな災害や悲しい出来事、それに加え心荒ぶ事件も多く、そうした中で浮薄な世相が日増しにひどくなる様で、いったい日本は、また世界はどうなるのか、先行き不透明な時代が続いております。

徳真会グループは来年 40 周年の節目を迎えます。昭和 (56 年) の時代に創業し、平成の時代に全国、そして海外に拠点が広がり、今年から令和の時代になり、振り返れば 3 つの時代と共に生きてきたわけです。

創業時、28 歳だった私も今年 67 歳となり、歳月の速さと同時に重さを感じる年齢になっております。

この 40 年の歳月の中で多くの人達との出会いがありました。有名無名を問わずそうした人達から学んだことは、私にとっても組織にとっても多大な財産でもあります。

そうした多くの出会いの中で、生きていくことに疲れた時、ふと思い出すのが詩人の故 坂村真民先生です。

先生とは今から約 30 年前、創業 10 周年の年に、縁も所縁もない新潟県旧新津市で松村歯科を開業し、育てていただいた新潟市へのお礼に、秋葉山公園の仏舎利塔脇に真民先生の詩「念ずれば花ひらく」の石碑の建立をお願いに愛媛のご自宅に伺ったのが初めての出会いでした。

世の中には、地位や名声の高い人もおられますが、会って相手緊張してしまうようではまだまだで、会っていて春風のように穏やかで、会った後に何とも言えぬ風韻を感じるような人を「覚者」というのではないかと考えていますが、真民先生は正に「覚者」たる人物でした。

その真民先生の詩で有名な詩は沢山ありますが、今日は私の好きな詩をいくつか紹介したいと思います。

いずれの詩も、人生を本気で生きている人にとっては、魂を揺さぶられる詩ではないでしょうか。

こうした詩を読んで、混迷の時代を確固たる信念をもって生き抜いていきたいものです。

徳真会グループ
代表 松村 博史

< 坂村 真民先生 プロフィール >

明治 42 年 1 月 6 日、熊本県に生まれる。
8 歳の時、父親の急逝によりどん底の生活に落ちる。
5 人兄弟の長男として母親を助け、幾多の困難と立ち向かう。
昭和 6 年、神宮皇学館 (現皇学館大学) を卒業。
25 歳の時、朝鮮にて教職につき、36 歳、全州師範学校勤務中に終戦を迎える。
昭和 21 年から愛媛県で高校の国語教師を勤め 65 歳で退職、以後詩作に専念する。
四国移住後、一遍上人の信仰に随順して仏教精神を基とした詩の創作に転じる。
詩の愛好者によって建てられる真民詩碑は、日本全国 41 都道府県に分布、また海外にも及ぶ。
「自選坂村真民詩集」エッセイ集「念ずれば花ひらく」歌集「石笛」随筆集「茜の雲流るる時」詩集など著書多数、50 年以上にわたり「詞国」を主宰。人々に「生きるための言葉」をたくさん残され、2006 年 (平成 18 年) に 97 歳で永眠されました。

< 徳真会グループとのかかわり >

1991 年 (平成 3 年) の徳真会グループ創業 10 周年を記念し、新潟市 (旧新津市) 秋葉山に全国で 171 番目となる「念ずれば花ひらく」の石碑を設立、寄贈。
当時 82 歳の坂村真民先生には、遠路四国よりお越しいただき、入魂式を執り行いました。
当グループ代表 松村博史と親交が深く、徳真会グループの医院にも特別に、真民先生の書を飾らせていただいております。
また、その後も代表 松村と坂村真民先生の交流は、晩年まで続いていきました。



徳真会グループ研修センターの石碑

< 坂村 真民先生 詩 >

「花」

何が一番いいか
花が一番いい
花のどこがいいか
信じて
咲くのがいい

「苦」

苦がその人を
鍛え上げる
磨き上げる
本物にする

「一手」

凡才には
長生きの
一手しかない

「つみかさね」

一球一球のつみかさね
一打一打のつみかさね
一歩一歩のつみかさね
一坐一坐のつみかさね
一作一作のつみかさね
一念一念のつみかさね
つみかさねの上に咲く花
つみかさねの果てに熟する実
それは美しく 尊く
真の光を放つ

「生きていく力がなくなる時」

死のうと思う日はないが
生きてゆく力がなくなることがある
そんな時お寺を訪ね
わたしはひとり
仏陀の前に坐ってくる
力わき明日を思う心が
出てくるまで坐ってくる

「鈍刀を磨く」

鈍刀をいくら磨いても
無駄なことだというのが
何もそんな言葉に
耳を貸す必要はない
せっせと磨くのだ
刀は光らないかもしれないが
磨く本人が変わってくる
つまり刀がすまぬすまぬと言いながら
磨く本人を
光るものにしてくれるのだ
そこが甚深微妙の世界だ
だからせっせと磨くのだ

「生きることは」

生きることは
自分の花を咲かせること
風雪に耐え寒暑に耐え
だれのものでもない
自分の花を咲かせよう

「花」

花には
散ったあとの悲しみはない
ただ一途に咲いた
喜びだけが残るのだ